

# Tea Times



創刊号

1

FEB 2002

特集

お茶の水女子大学の行方

本田和子学長

3

門出のとき

## 記事

表紙・目次	1
「Tea Times」の誕生に寄せて(本田和子学長)	2
お茶の水女子大学の行方(本田和子学長)	3
募金のお願い	3
国際日本学シンポジウム(平野由紀子教授)	4
21世紀における女性の教育研究推進のための 合同フォーラム(平野恒夫教授)	5
研究室紹介(松浦秀治助教授)	6

留学生センター紹介(福田豊留学生センター長)	7
NHK賞受賞(片岡康子教授)	7
オープンキャンパス(入試課)	7
附属学校園の近況(石川宏附属学校部長)	8
新しい教養教育の夜明け(市古夏生副学長)	8
入試情報(入試課)	8
編集後記	8

## 「Tea Times」の誕生に寄せて



いまここに、新しい本学の情報誌として「TEA TIME S」が誕生する。この小雑誌を手取る方々へ、お茶の水女子大学の「いまの姿」を知って頂くとういうのが発刊の狙いである。国立大学を巡って、時々刻々、変転極まらない激しい風の吹き荒れている昨今、本学のキャンパスにはどのような時間が流れ、学生や教官たちはそれをどのようにに受け止め、どのように判断しつつ日常を過ごしてい

るのだろうか。

本学は、周知のように、百二十六年という歴史の末に位置するわが国最古の女子教育の場である。いま私たちは、時のうねりのなかにあつて、変わり得るものと変えてはならないものとを、賢く分別・整理して、新しい時代に備えようとしている。多くの方々にお知らせしたいのはその経緯であり、志を同じくする方々に分け持つて頂きたいのは、この時ゆえに生起する新生の痛みと喜びである。お茶の水女子大学は、この雑誌を介して結ばれる全国の誌友たちと、独立行政法人化へ向かう現在の歩みを、共有していきたいと願っている。

ところで、本誌の名前から「S」を取ると「TEA TIME」つまり、「お茶の時間」ということになる。たまにはゆっくりとくつろいで一服のお茶を楽しみながら、茶室の窓越しに見える本学の様々な側面を発見して頂きたいというのが、本誌の隠れた狙いでもある。真面目一辺倒、地味で慎重で守旧的と見られがちな本学のなかから、時に見え隠れする新鮮で大胆な動きを眼に止めて頂けるだろうか。そして、その動きを支える学生や教職員のナイーブな素顔の愛らしさ(?)にも・・・。そのためには、

本誌を手にとられた皆様に対して、いとも簡単に「燃えるゴミ」として屑籠にほうりこんだりせず、一枚一枚ページを繰って頂きたいと願うことしきりである。

### お茶の水女子大学長

本田 和子  
(ほんだ ますこ)

#### 略歴

生年月 一九三一年一月生

#### 専門分野

児童学・児童文化論・児童社会史

#### 主な職歴

一九五七

尚絅女学院短期大学講師

一九六二

十文字女子短期大学助教授

一九七〇

お茶の水女子大学家政学部助教授

一九八三

お茶の水女子大学家政学部教授

一九八九

お茶の水女子大学家政学部長

一九九五

聖学院大学人文学部教授

二〇〇一

お茶の水女子大学学長

#### 社会・学術活動

日本保育学会常任理事

日本子ども社会学会理事

日本児童文学会理事

中央児童福祉審議会委員 等

## お茶の水女子大学の行方

「お茶の水女子大学よ、どこへ行く？」いま、私たちは、時々こんな問いを発してみる。余りにも先行き不透明で行く手の見えにくい昨今だからだ。何しろ、わが国の高等教育に關するグランドデザインが不確かな状況のなかで、独立行政法人化という設置形態の変化を迫られているのだから・・・しかし、にもかかわらず、私たちは、日々怠りなく前に向かつて歩き続ける。時間は、抗い難い激しさで私たちを押し進め、立ち止まることも後戻りすることも許さないからである。したがって、明確な将来を指し示すことは困難ながら、いま、私たちがとりあえず描き始めている本学の未来図と、現在着手しつつある改革の方向性について、幾つかのことを述べてみることにしよう。

お茶の水女子大学の誕生は、わが国近代の訪れとその時を共有する。学制公布間もない明治八（一八七五）年が、創設の時だからである。私たちは、いま、わが国女子教育の歴史そのものである一二六年のこの伝統を、かけがえない知的財産と見なし、その上に立って、本学を、今後とも女性たちの新しい知の創出の場として位置づけようと企図している。人と地球の危機が叫ばれ、女性特有の豊かな感性と、生活者としての着実な意識に大きな期待が寄せられて、「女性の時代」という呼び声も耳に著しい今日、長年の女子教育の蓄積を生かしつつ、彼女たちの資質能力の

さらなる開発を目指し、彼女たちのためにより相応しい教育環境を提供したいと願うからである。

本学は、これまで、女性研究者・指導者の育成を目標とし、高度な専門性を備えて指導的立場で活躍し得る人々を、とりわけ、教育界に多く送り出してきた。しかし、これからは、それら従来型の研究者養成に加えて、時代の要請に応え得る専門性の開発を目指し、同時に個々人の希望と適性に即応した新しい教育を実施しようと、特設プログラムの立ち上げを急いでいる。今後は確実に必要とされるであろう「夢の職種」の開拓と、養成コースの策定はその一端と言えよう。しかも、それらは、現役学生にのみ適用されるものではなく、学窓を離れた後に再び世に出る道を模索



している女性たちの前にも開かれたコースとしたい。本学を、すべての女性たちにとって、各人の可能性が目覚めさせられ、彼女たちの「真摯な夢の実現の場所」として機能させたいのである。

国立大学として保護された存在形態から離れ、厳しく自己責任を問われることとなる今後、本学が選択を志向している小規模女子大の道は決して平易ではない。しかし、私たちは、いま、茨の道かも知れないこの選択肢をも視野に入れて、力強くその一歩を踏み出そうとしている。多くの誌友たちに、ご理解とご支援をお願いする次第である。

## 募金のお願い

「コイン一つでお茶大を支えよう！」

こんなスローガンの下に、新しい募金活動がスタートします。独立行政法人化に向けて、準備開始の号砲の鳴ったいま、活動基金獲得のために、主として桜蔭会員中心に始められようとしているのです。「本当にコイン一つですか？」そう、五〇〇円コイン一つです。本当に！ただし、「毎月、確実に」そして「今後ズッツと継続して」というのが条件ですが・・・。

本誌を手にとられた同窓生以外の誌友のなかからも、募金に参加してくださる方が現れることを期待してこんな一文を挿入しました。（虫がよすぎるでしょうか？）

でも、どうぞ、よろしく！

詳細は次号以降でお知らせします。

## 国際日本学シンポジウム

大学院人間文化研究科 教授

平野 由紀子

Q、「新しい日本学の構築」のテーマはⅠⅡⅢと回を重ねてきたそうですが、どんな人たちが参加なさるのですか。

A、二〇〇一年七月(Ⅲ)は延べ約四〇〇人の参加者でした。毎回、猛暑の七月に開催しています。第一回は、まだ冷房のない教室でしたので、倒れる人が出たらどうしよう、と心配でした。「海の日」の前の週末に固定したのは、帰国した留学生を始め、卒業生が集まれるようにとの配慮です。

Ⅲの例ですと、分科会「アジアにおける日本研究」「道行と音楽」「都市祝祭の国際比較」など六つ、一般に公開された特別企画は「多言語・多文化共生社会とバイリンガル教育」。これまでの講演には、アン・ウォルソール(カリフォルニア大学)、「日本の比較史——大奥の場合——」(Ⅰ)、ダビット・ラプス(カレル大学)、「漢チェコ辞典の完成」、ヴォルフガング・シャモニ(ハイドルベルグ大学)「なぜ外国で日本文学を研究するのか」、外山滋比古(本学名誉教授)「外国からの方がよく見える」(以上Ⅱ)など。

報告書への礼状を一つ——「どうしても狭くながちな視野をぐっと広げるようなご本を頂戴し嬉しく存じます。「国際」と「新しい」という字義通りのシンポジウムを開催できる貴学の学生のみなさんを本当に羨ましく思います。」

Q、どこが新しいのですか？

A、多岐に渡る分野とテーマを持つ日本学の研究は、従来国際的交流が乏しいまま各国で個別に行われてきました。日本においても同様です。本学では、一九九九年に文学・歴史・地理・音楽・美術・舞踊・服飾・日本語教育の研究者が集まり、国際日本学専攻が、新設されました。学際性を特色とする博士課程が発足して二〇年以上になります。その蓄積の上に成立したものと云えます。日本と海外の日本学とのネットワーク作りの拠点を目指します。二〇〇〇年(Ⅱ)に伊藤謝恩財団の助成を与えられたのもそこを評価されたのです。

Q、次のシンポジウムはどのようなものを予定していますか？

A、今年のテーマは「国際」日本学との邂逅



Encountering Japanese Studies Abroad by 平野

日本の宗教・日本の恋歌を中心に分科会を開きます。また、アメリカの若手女性研究者を迎え、日本文学に描かれる女性像についてパネル・ディスカッションを計画しています。今までと同様、全て日本語です。

Q、おもしろそうですね。どのようにして参加できますか？

A、二〇〇二年七月一三(土)・一四日(日)に予定。六月上旬よりプログラムと申込用紙を配布しますので、人間文化研究科の助手室(電話 〇三―五九七八―五八二三、FAX 〇三―五九七八―五八九六)までご連絡下さい。また、ホームページ：<http://www.ocha.ac.jp/gradu/sympo/index.html> 上でも御覧になれます。

The 3rd Joint Forum of Ewha Womans University Japan Women's University, and Ochanomizu University for the Promotion of Education and Research in Science for Women in the 21st Century (Nov. 8-10, 2001)

二一世紀における女性のための科学における教育と研究の促進に向けて  
梨花女子大学(韓国)、日本女子大学、お茶の水女子大学による  
第二回合同フォーラムを開催

理学部化学科 教授

平野 恒夫

秋も深まった二〇〇一年一月八日、本学の理学部三号館と人間文化研究科棟で、梨花女子大学(韓国)、日本女子大学、お茶の水女子大学の三大学の理系の先生およびび学生、総勢一五八名(内、学生は一〇〇名)による「二一世紀における女性のための科学における教育と研究の促進のための梨花女子大学、日本女子大学、お茶の水女子大学による第三回合同フォーラム」が開催された。これは、お互いに学術交流協定、単位互換協定を結んでいる三女子大学が一堂に集まって、学術交流のかたわら、二一世紀の女子大学の教育・研究を考えてみよう、という趣旨で開かれたものである。

梨花女子大学は韓国の名門女子大学(学部学生数一万六千、大学院生数五千)で、本学とは平成一二年三月に学術交流協定を結んで、研究レベルでの交流を積極的に推進しようとしており、平成一二年八月の日本女子大学と梨花女子大学の第一回フォーラム(日本女子大学)、平成一二年三月の三女子大学による第二回フォーラム(ソウル)に引き続き、今回は本学で行われた。

フォーラムはすべて英語でおこなわれたが、お互いに十分な意思の疎通が出来たかと思われる。

「二一世紀、女性が輝くとき」を標榜する本学の本田和子学長の開会の辞に引き続き、男女共同参画社会を実現するため梨花女子大学が果たすべき責務を日韓双方の基調講演三件で確認した。

本学からは平野が分子構造総合討論会での現状分析、本学の付属高校生



進路調査統計を踏まえて、若手の女性研究者層は厚いのに、現時点で指導的立場に立っている女性が少ないことに鑑みて、本学は、かつての東京女子高等師範学校以来の伝統に立ち返って、自立性の高い女性リーダーの育成に努めるべきであることを提言した。梨花女子大学からは Heisook Lee 前国際教育院長が韓米にまたがる WISE (Women in Science and Engineering) プログラムを紹介し、日本女子大学理学部の小尾欣一先生は、二〇〇一年に創立百周年を迎えた日本女子大学の、建学の精神に基づく女子教育の取り組みについて語

った。引き続き、物質科学、ライフサイエンス、服飾繊維、コンピュータサイエンスと数学の四部門の総計五四編の研究発表を二日間、三会場に分けて行った。参加者(カッコ内は内数での学生数)は梨花女子大学二九名(一七名)、日本女子大学一三名(七名)、本学から一六名(七六名)であり、研究発表は二〇三頁におよぶ要旨集をもとに、活発に行われた。内容は改めて「お茶の水女子大学自然科学報告」に収録される予定になっている。

本フォーラムは、私と、増永、會川、室伏、森川の諸先生方を中心として企画実施されたもので、本学の、学長裁量経費「二一世紀における女子大学―理系教育とその課題」と、国際交流基金の支援の下に行われたことを記して感謝したい。第四回フォーラムは日本女子大学で行われることになり、小雨の中、再会を期して名残を惜しんだ。



本学では、平成四年一〇月の家政学部から生活科学部への改組に伴い、自然科学系の基礎講座として人間科学講座が新設され、平成一三年度には人類科学講座と名称変更された。人類学あるいは人類科学という名が冠せられた学科・講座等は少なくないが、「生物としてのヒト」を主な対象とする生物科学系人類学の教育・研究を特色とする組織は、国立大学としては、東京大学、京都大学、大阪大学に次いで四番目の設置である。本講座の目標も「ヒトとはどういう生き物であるか」を知ることであるが、それには多面的な研究調査が必要となる。私の場合は、地球における人類の起源と進化という面に興味を持ってアプローチしている。進化を研究するには、進化の一番具体的な資料である化石の時代を調べることが不可欠である。そこで化石骨を分析して年代の推定を行っている。

現在私たちの研究室では、フッ素法などの化学成分分析による年代判定法、放射性炭素年代測定法などを併用して進めているが、化学成分分析による方法については一般になじみがないと思われるので、簡単に説明する。

生体の骨の主成分はコラーゲン蛋白とリン灰石である。骨が土に埋まるとコラーゲンは徐々に分解し減少していく。一方、鉱物質のリン灰石が受ける作用は多様であり、その結晶構造をほとんど変えることなく、土中の様々な元素を取り込んだり、元来の元素を放出したりしている。こうして、ある成分元素は増加し、ある

成分元素は減少していく。このような元素はすべて化石骨の相対的な新旧や古さを判定するための指標となる潜在性を持っている。

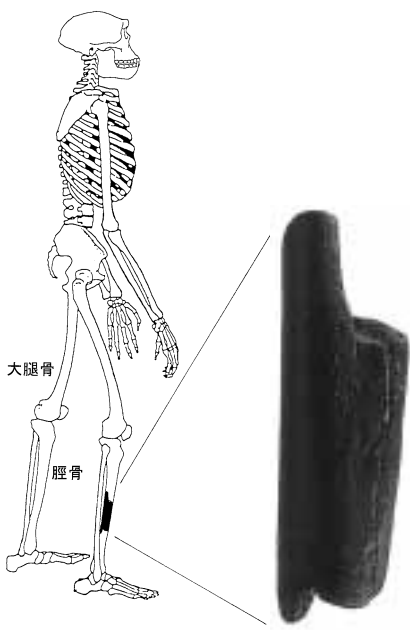
筆者らの最近の研究例を紹介する。図は一九七七年にインドネシアのジャワ島で発見された人類のすねの部分の骨である。黒色で「化石」化していたが、長い間時代がはっきりしなかった。骨に含まれるフッ素やナトリウムなどを測定した結果、およそ一〇〇万年前の地層に由来するものであり、ジャワ原人である可能性が極めて高いことが判明した。ジャワ原人化石はこれまで頭骨や歯がほとんどで、首から下に関してはももの骨しかなかったが、このすねの骨とあわせて当時の歩行形態などを解明する手がかりが加わった。古いにもかかわらず、形が現代的であることが注目される。

また、数年前から、日本の「旧石器時代人骨」の年代の見直しを行っているが、本年度に入ってから、三ヶ日人の骨が縄文時代に帰属することが明らかになるなど（平成一三年九月七日の新聞誌上に紹介されている）、新しい年代学的再検討が進むにつれて、従来は旧石器時代人骨と考えられていた資料が、より新しい時代のものであると判明することが少なからずあり、先人の並々ならぬ努力をもつてしても、日本で旧石器時代人骨を探るのがいかに難しいことであるかということとを再認識する昨今である。

こういう分野の研究では、貴重な「国宝級の」資料を扱うことも多く、分析に

伴う破壊を最小限におさえることが必要であり、少ないサンプルで多くの情報を引き出すことが重要である。現在、骨の成分分析に必要な量は多くても二〇分の一グラム以下であり、放射性炭素年代測定についても、五分の一から一〇分の一グラムの骨からコラーゲンを抽出する手法を工夫している。こうした、サンプルの少量化が最も苦勞するところである。もう一つの苦勞は、私が女子大に勤務していることで、皆さんうらやましがりますが、骨を粉にして分析したいという女子学生がなかなか現れないことである（一方で、本学の学生は大変着実で粘り強く、分析試料の少量化に成功したのも、私が女子大にいる成果かもしれない）。しかし、吹けば飛ぶような粉が、我々の祖先の姿を明らかにし、ひいてはヒトという生物種を理解し、実証的で偏りのない人間観を確立する鍵というロマンを与えているのである。化石骨は「死」ではなく、「化石となった生」である。

ジャワ島から出土したヒトの脛骨化石



新年に当たり留学生センター  
からごあいさついたします

留学生センター長

福田 豊



明けましておめでとうございます。当留学生センターは、二〇〇一年四月に新しく発足しました。四名の専任教官がつきましましたので、まず、センター教官を公募しました。その結果、九月には、新しく次の二名の助教授の方々を迎えることが出来ました。加賀美常美代先生は、三重大学留学生センターから、森山新先生は、韓国世宗大学から本学に転入されました。既に文教育学部から移られた二名の専任教官（村松賢一教授、佐々木泰子助教授）とともに、本センターの任務を遂行すべく一丸となって張り切って活躍されています。

本学は、規模として全国的に見ると少人数の教官と職員ですが、少人数教育のよさを生かして頑張っています。その教育・研究環境を守り育てていくためには、あまり多くの組織を立ち上げるのではなく、今ある組織を如何に効率良く機能的に動かすかが大事なことだと思います。その点で留学生センターを考えるとみると、海外からの留学生の受入業務とそれに伴う日本語教育のみを一義的に進めて良しとするわけではなく、本学学生の海外留学支援や研究、教育のための国際交流をますます活発にすすめる任務等も持たねばならないものと思います。幸い、センター運営委員会のもとに今後の留学生センターのあるべき姿を検討するワーキンググループが出来、昨年

一月から話し合いを薦めております。できるだけ早急にこの会議の答申を出し、運営委員会ですれをまとめ、今後のセンターのあるべき姿を定め、全学的なコンセンサスのもとで良い体制を作っていくたいと思います。その内容については、今後、機会あるごとに皆様にお知らせしていきたいと思っております。どうぞ、よろしくお願い致します。

学生たちの今もてるすべてを懸けた踊り  
NHK賞を受賞

文教育学部芸術・表現行動学科

舞踊教育学コース 教授

片岡 康子

今年も五月から七月まで熱い夏を学生たちと過ごしました。第一四回全国高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）のコンクール部門に参加するためです。幸いにもNHK賞受賞（これまで文部大臣賞四回、NHK賞三回他受賞）。準優勝にあたるその成果に対して学長表彰を受けました。

群舞は、一人ひとりが自分をさらけだし友だちを理解するようになっていて、心が響きあう作品となります。オープンキ



キャンパスの日、学生たちの今もてるすべてを懸けた踊りに息をのみ、感動の涙を流す高校生たちがいました。あきらめずに「限界はない」と信じるだけで可能性は無限に広がります。今回も、壁を突き抜ける場面やからだに真の表現が現れる場面に立ち合うすばらしい日々でした。

大学見学会（オープンキャンパス）

本学の教育・研究に関心を持つ者を対象とした「大学見学会（オープンキャンパス）」を平成一三年七月二〇日（海の日）に開催、全国各地から一〇〇名を超える参加者があり、盛会に終わりました。

見学会では、まず、学部全体の説明会を午前中に生活科学部、午後から理学部、文教育学部の順で実施、説明会終了後、各学科等に別かれて模擬授業、講演会、研究室公開等を行うとともに図書館見学、学食体験、入試情報・カリキュラム・学生生活質問コーナー、在学生によるなんでも相談コーナーなども設け、好評でした。

また、今回は学長からの「見学者の方々と直接お話ししたい」との強い希望から、急遽懇談の場を設けました。急な企画で参加者は限られてしまいましたが、中には本学の卒業生でお子さんと一緒に参加された方もあり、本学が行ってきた女子教育、少人数教育のすばらしさなど、在学時の経験話をまじえた母親としての立場から貴重なご意見をいただくなど、こちらもたいへん好評でした。

平成一四年度の大学見学会の内容については未定ですが、本年度と同じ時期（平成一四年七月頃）を予定しています。

## 附属学校園の近況

附属学校部長 石川 宏

いま国立大学は統合再編も含めての「構造改革」の真っただ中にあります。附属学校は大学に附属する組織であり、とうぜん大学改革の影響を受けます。その意味で「在り方懇」（正式には「国立の教員養成系大学・学部」の在り方に関する懇談会）が昨年の一月に出した報告書の内容に、すべての附属関係者が注目しました。この報告書では「非教員養成系大学・学部」の附属学校についてこう書かれています。「これらの附属学校は、実験的、先導的な教育課題への対応等、国立の附属学校として取り組むことが必要で、当該大学として教育研究上真に必要とされる場合は、存続させることが適当であるが、その必要性が認められない場合は、段階的に地方移管や廃止の方向で検討することが適当である。」言い換えれば、本学のような非教員養成系大学の附属学校の場合、学部・大学院が附属をフィールドにしてどんな教育研究を行うのか、それが国立大学に求められる課題であるのかどうか。それらの検証の後で、附属学校園の今後の存否が決められるということです。本学では、学部・大学院と附属の間に、従来かなりの相互交流があります。とはいえ、附属四校園が今後も存続するためには、相互の連携をさらに強化しなければなりませんし、そのことによる教育研究上の成果をもっともっと目に見えるかたちで社会にアピールして行く必要があります。

以下は、これと無関係なニュースです。昨年「同時多発テロ事件」のあと、附属中学校では社会科学の時間にこれを取り上げ、生徒たちが大いに議論しました。その

結果を首相官邸にメールで送ったところ、思いがけなく小泉総理から返信が届いた（一月九日付け）とのこと。若い世代の率直な意見を知らせてもらったことのお礼とテロと戦う政府の決意、それに生徒たちを激励する言葉が記されていたということです。自主研究をモットーとする附属中学らしい話題ですのでご紹介しました。

## 新しい教養教育の夜明け コア・クラスター制度始まる

副学長 市古 夏生

平成一四年度より、従来設置されているコア科目以外に、コア・クラスター制度という新しいタイプの教養教育を始めることになりました。学部にて設けられている専門教育とは異なる学問分野を核として、色々な専門領域からその核と関連する授業科目を提供してコースを設置するものです。当面は「ジェンダーコース」と「総合環境学コース」の二コースですが、順次コースの増加をはかる予定です。この制度の特徴は

- ①学部や学科を問わずに、学生の自由意志で登録することができます。本学ではあまり開講していない、一六時四〇分〜一八時一〇分の時間帯に授業科目が置かれています。
  - ②登録する学生の資格は、コース内で必修科目含めて5つ以上の科目を履修する強い意志を持つていことが、唯一の条件となります。
  - ③5つ以上の科目を履修した後、卒業時にコース修了証明書を交付します。
- 専門教育以外に、まとまりのある高度な教養教育を受講することは、就職する学生にとっても大学院で研究する学生にとっても、自己の教養や研究の幅を広げ、しかも深化させる役割も果し、極めて有意義なことです。

学内での実施状況を見ながら、なるべく早い時期に外部の方々に開放したいと思っています。

## 入試情報の提供について 入試課

本学では、入試日程、各入試の実施状況、学生募集要項お茶の水女子大学および同要項等の入手方法な

区分	募集員	志願者数	合格者数
推薦入試	76	348	86
文教育学部	31	156	37
理学学部	24	66	26
生活科学部	21	126	23
第3年度編入学	30	337	42
文教育学部	10	194	16
理学学部	10	57	16
生活科学部	10	86	10

(単位:名)

どの入試情報(本学大学院入試情報も含む)を各種刊行物のほか、インターネット上の本学入試課ホームページでも提供していますので、ご利用ください。《<http://www.sococha.ac.jp>》  
なお、平成一四年度入試の実施状況平成一三年一二月までに終了している入試)は下表のとおりです。

## 編集後記

建学から数えて一七七年目を迎えた本学は、これまでに経験したことのない様な変革の荒波にもまれていきます。昭和七年に建造された生活科学部本館の裏手には、八階建ての新研究棟を建設中で、キャンパスの様子も次第に様変わりしつつあります。正門脇の大きな看板に記された、「二一世紀、女性が輝くとき」とのキャッチフレーズが学生たちを出迎え、歴史と伝統のなから、新しいお茶の水女子大学の幕開けを促しているようです。本学の最新情報を発信するため、この広報誌が発刊されました。どうぞ、ティーカップを片手に、本学が歩んでいく姿にご注目下さい。(秋)